

【 会員投稿 】

ありがたい・おかげさま 大槻伸次

私は、従来から宗教や哲学的なことに関心を持つこともなかったが、父は『般若心経』は心の支えだと言うのを聞いたことがあった。振り返ってみると、確かにそうだったかなと感じられ思い当たるものが幾つかあった。

それは半世紀以上の昔のこと、夜半隣組で起きた不幸で悲惨な出来事の対処について、父の勇氣に感激した事があった。私はもちろんのこと、近所の大人たちは怖くて震え声すらなかった。父曰く、俺は『般若心経』を信仰していると平静だった。

また従兄は、認知症の妻を連れ出し、全国行脚と四国霊場巡礼の満願を果たし、よく面倒を見ていた。そして私の父や、人生半ばで亡くなった弟妹達の供養のときに、必ずお経をあげてくれたがいつも『般若心経』だった。従兄も『般若心経』は心の支えだったようだ。翻って、人をこんなにも強くしてくれる『般若心経』というお経に関心を持ったことがあった。

奈良の古刹、薬師寺の故高田好胤元管長が薬師寺再建の浄財を得るために、参拝者に「写経」をお願いしていたことはラジオやテレビでも度々取り上げられていたが、この写経が『般若心経』だったと記憶している。

私自身、昨年(平成 23 年)は定年から満 10 年を迎え、人生の節目の古稀でした。この 10 年間、地域への恩返しとして地区交番連絡協議会員 6 年、地区防犯常任委員 5 年、そして今年の 3 月、5 年間の区長代理と区長の役を終えることが出来た(延べ 16 年間・定年前 12 年間、地域「子育て連」副会長経験)。そこで、ようやく地域の役から開放され、これからの生活について考え、何か心の支えになるものはないかと思ったのが、父が熱心に信仰していた『般若心経』だった。

『般若心経』は緒先輩たちが学んだありがたいお経であり、私のような凡人がとても理解できるお経でないというのは解かっているが、一つでも二つでも生きるヒントや道筋が見つければ幸いであろう。

そこで、『般若心経』とはどのようなお経なのか書籍やネットを使っていろいろ調べてみたところ、沢山の先生方が解説しているのを目にした。

ところがどれも難しかったが、そのなかでも比較的取っ付きやすかったのは「元南無の会会長」の故松原泰道氏(明治 40 年東京生/昭和 8 年早稲田大学卒)の講話だった。そこから一部要点を纏めてみた。

『般若心経』の中で、最もよく知られている「色即是空 空即是色」という一節がある。難解とされるこの一節をどう理解して、どういうふうにも実生活に生かしてゆかが課題だといっている。

まず「色」には「作られたもの、形があるもの」という意味があるそうだ。同時に「壊れゆくもの」という意味ももっているという。一方、「空」は「なにもない、崩れゆくもの」という意味である。

この二つが合わさって「色即是空」となるので「色即是空」を「形あるものは、壊れ崩れていくものだ」と訳すことができる。つまり、「全てのものは移り変わっていく」ということで

あるという。「全てが移り変わる」というと、消極的な意味にとられがちですが松原氏はプラスの方向に受け取りたいと思いますと語っている。

例えば、死は寂しいことですが、死があるから私たちが存在できる。人類の誕生の時代からの祖先がみんな生きていたら、私たち現代人は生きる場所がありませんといっている。要するに死があるから、私たちは生きることができるのである。

では、「空即是色」は「色即是空を言い換えているだけ」ではなく「空即是色」の「空」は「何も無い、崩れゆくもの」という意味と同時に、全てのものがなぜそのように存在するのか、その原理を示す言葉でもあるという。

存在の原理とは、「全てのものはかかわりあって存在している。そのものだけで存在するものは何もない」ということである。

人間は独立した一個人で存在するのではなく、両親や祖先という縦のつながりがあるのはじめて誕生できる。そして、口にするものや着るもの全てを自分で作ったわけでないように、他の人とのつながりの中で存在しているのである。

今風に言えば、「空即是色」とは「相関関係」「共に生きる」を表した言葉といえるでしょうと結んでいる。

さらに、「色即是空＝すべてのものは移り変わる」がわかるということは、「ありがたい」がわかることといえるという。移り変わる存在である以上、ここにあるということは非常に珍しいことなのです。人は生まれたら死ぬのは当然ですから、生きていくことのほうが珍しい、稀有なことなのである。稀有とは「まれにある」「あることが有り難い」、つまり「ありがたい」ということなのですという。

そして「空即是色＝全てがかかわりあって存在している」が分かるとは、「おかげさま」がわかるということです。この「ありがたい」「おかげさま」を体得できれば『般若心経』を理解したといえるという。

どんな場合でも「ありがたい」、「おかげさま」と思えるような、一見なんでもないことに意味と価値を見つけていく積極的な姿勢があれば、どんな困難にも耐えることができるでしょうと結んでいる。

しかし、知識として理解できても、実際に自分の身に東日本大震災のような不幸が降りかかったら、こんな知識は吹き飛んでしまうかもしれません。ですからこの心理をどう受け止めて人生に生かしていくかが大事になってくるのである。

『般若心経』は観世音菩薩が舍利子という釈尊の弟子に「空」を説くという形をとっている。菩薩の名前は釈尊の修行を象徴しておりここに『般若心経』を体で受けとめるヒントがあるというのである。

「観」は観察、つまりよくみて真理を察しとること、「世音」は世の中の声、という意味。観世音菩薩が象徴しているのは自分の周りを良くみつめ、そこに真理を発見する修業ということになる。これは物事の表面だけを見るのではなく、自分の体で受け止め、体得すると云うことだろう。以上で松原氏の講和の紹介をしましたが『般若心経』の解釈はこれからの自分の生き方の一つとして参考になるものである。